

氏名	中西雄二
学位の専攻分野の名称	博士（地理学）
学位記番号	甲文第122号（文部科学省への報告番号甲第415号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2012年3月2日
学位論文題目	日本の大都市圏における移住者コミュニティの文化・社会地理学的研究
論文審査委員	(主査) 教授 八木 康 幸 (副査) 教授 山 口 覚 教授 島 村 恭 則

論文内容の要旨

中西雄二氏の博士学位申請論文『日本の大都市圏における移住者コミュニティの文化・社会地理学的研究』は、序章と第1章から第5章までの6つの章、および結語から構成されている。

「序章」では、目的と方法を提示している。人文地理学、とくに社会地理学における移民研究やエスニック集団研究、都市社会学における出郷者研究の潮流を展望し、コミュニティ論とアソシエーション論、ナショナリズムと同化理論などの批判的検討を踏まえた上で、神戸における「奄美」出身者を対象として、そのアイデンティティの変容を同郷団体の形成過程と役割から解明することを目的に設定している。

「第1章 戦前期の神戸における奄美出身者の同郷団体とネットワーク」では、奄美出身者向けの月刊誌『奄美大島』（1925～1944）を対象に、そこに見出される同郷団体の活動に携わる出郷エリート層の言説の分析を通じて、同郷団体生成期の状況と、ホスト社会のまなざしとの関係性の中に生起する奄美出身者の対応を明らかにしている。戦前期では、「本土」への同化が期待されながら、あわせて同郷者の連帯も強く維持される、という両義的な特性が指摘されている。

「第2章 終戦直後の激動期と「復帰運動」」では、奄美諸島の米軍統治時代（1945～1953）の本土復帰運動において、奄美諸島の住民と、本土在住の奄美出身者によって提示されるアイデンティティやその収斂と分離の様相を、運動を通じて発せられた宣言や声明のテキスト分析を通じて明らかにしている。戦後の復帰運動期にも戦前からの志向性が大きく影響し、日本本土との同一性を訴える一方で、琉球との差異を強調することによって、返還と復帰を求める社会運動が展開されたとしている。

「第3章 奄美返還後の同郷団体とネットワーク」では、本土復帰後の同郷団体の動向や集住地区の形成過程などを見るため、神戸沖洲会と神戸徳之島連合会の会員に対するアンケート調査と、聞き取りや参与観察を通じた分析を試みている。移住時期、団体活動への参加、連鎖移住、就業形態、居住地の移動などに、奄美出身者の同郷ネットワークが社会関係資本として機能する諸契機を明らかにするとともに、血縁関係の強い紐帯を利用しつつ、島や集落など様々な規模の同郷団体を介して構築された多様な人間関係が、同郷ネットワークの様態であることを指摘している。

「第4章 同郷団体とエスニック・シンボル」では、戦後における同郷団体活動が、時に政治性を帯びることもある相互扶助的なものから、やがて親睦的要素を強めていく過程を、前者は定期航路の整備改善運動、後者は演芸会や敬老会、各種運動会などの事例を通じて論証している。さらに、同郷団体によって設立され

た神戸沖洲会館と神戸奄美会館における文化活動や、阪神圏に読者を持つ同郷者メディア『奄美通信』の主催するイベントに示される、奄美イメージの強調と沖縄イメージの流用の諸例から、「ふるさと」が島唄や舞踊などの表象を通じて再構築されゆく状況を明らかにしている。

「第5章 再移住と地域を越えたネットワーク」では、川崎製鉄水島製鉄所の操業に伴い、沖永良部島出身者が神戸から倉敷へ再移住する過程で設立された岡山沖洲会に注目している。既存の地縁血縁関係の再配置ではなく、同郷を介したネットワークの構築を通じて、新しい土地における人間関係が求められた経緯を、同郷団体活動に携わった関係者の語りを通じて明らかにするとともに、集住や就職への特定企業の介在を通じて、全国沖洲会連絡協議会のような地域を越えた同郷者ネットワークが成立する状況にも言及している。

「結語」では、以上の議論を踏まえて、奄美出身者のネットワークが、本土の多数派社会や隣接する沖縄との関係性の中で、様々なスケールのコミュニティを輻輳させながら、動態的に構築されてきたことを総括するとともに、奄美文化をシンボルとして掲げるアイデンティティが、多数派社会の中に肯定的に取り込まれる一方、他方では、それが都市生活の中で、奄美出身者の共同性の維持と再生産とに利用される状況を指摘している。

論文審査結果の要旨

中西雄二氏の論文は、近代工業化が進行する時代に、おもに労働者として阪神大都市圏、とりわけ神戸に移住した奄美出身者を対象にして、その移動・定着の過程や同郷団体の形成過程に分析を加え、彼ら／彼女らのコミュニティの複雑な様相とアイデンティティの変容、同郷者ネットワークの形成、現代にいたる自己表象の集散的な諸実践などを、時間的契機に沿う問題意識のもとに明らかにしようとした一連の議論から成り立っており、博士学位申請論文にふさわしい構造を有している。

国民国家の周縁地域の一つともいえる奄美とその出身者への注目、先行研究の検討を経て設定された理論的な枠組み、戦前と戦後をつなぐ通時的な研究の視座のそれぞれは、オリジナリティに優れる。新聞記事・同郷者メディア・企業関係資料・復帰運動関係資料・公文書や各種統計・アンケート調査・インタビュー・参与観察調査などをもとにした分析は堅実で安定感があり、地図作成や図表化などのデータ処理も巧みである。

本土への同化と同郷の連帯をともに求める戦前期の対応の両義的性格や、本土復帰運動期に見られる同化志向と沖縄との差異の強調という、領域的アイデンティティが生み出す二面性の指摘は、新たな資料の丹念な検討を経て導かれた意義ある成果といえる。戦後における同郷団体と同郷ネットワークが、単なる血縁や特定の島や集落などの地縁に収斂しない、重層的で多様な関係性によって成り立つ社会関係資本であることを明らかにした点も評価できる。

従来の相互扶助的な紐帯に代替されるものとして、運動会や演芸会のような文化イベントや、そこで演じられる歌謡や舞踊など、親睦を目的とする文化的シンボルがネットワークの結節をなす現状についての指摘は、かつて他者とした沖縄イメージの流用とともに、現代の同郷団体に集う人々の可変的なアイデンティティの構築的側面をよりよく示しえたものである。岡山沖洲会に見られる、再移住した人々の創り出すネットワークとアイデンティティの諸相もまた、同様の動態性を呈する。再移住の問題は、さらなる事例研究が積み重ねられてよいテーマである。

他方、個別事例から導かれた成果が、理論的諸前提に即した新たな問題を提起し得たか、言説と表象へのこだわりを比べて、奄美出身者の生活世界の実態にどこまで迫り得たか、同郷団体という集団を所与として扱うなかで、そこに属さない移住者の声を反映させることができたか、などの諸点については、中西氏も自覚するように、多少の物足りなさを残すこととなった。

神戸市を中心とした大都市圏というコンテキストにおいて、奄美出身者の生活世界の多層的・多声的な「厚い」記述と分析が可能となるよう、今後も中西氏により持続的な取り組みのなされることを期待したい。

審査委員会は、2012年2月13日に実施した口頭試問の結果をあわせて、以上のような評価を行った上で、本論文が博士論文に十分値するとの判断を得るとともに、中西雄二氏が博士（地理学）の学位を受けるにふさわしいとの結論に達したので、ここに報告する次第である。